

第三百三回 青葉会

平成二十三年六月二十三日(木) 午後六時〜九時

丸紅一階来客食堂 (談話室)

〈選者〉 ☆ 川合万里子 先生

〈出席者〉 石川清 今井紀久男 大林猛 小川恭延 柿崎忠彦 豊田ゆたか 福島正明
山内天牛

〈投句〉

伊賀山そらお 小西弘子 朱牟田恵洲 土谷堂哉 橋口隆 古田昇(新人)
南平和夫 宮内規雄 山崎亜也 渡邊盛雄
赤田堅 川口孤舟 庄司龍平 高橋敏郎 中山芳博 早川允章 村田くに子
山崎亜也 山崎青史 山本三恵

ゴシックは選者の天

《選者吟》

あぢさゝるも恋も多彩の今様に
汗引くや水族館でうぐひ撫で
余震なほパンツルツクの多き夏
蛍雪の故事学びつつ猛暑待つ
級友の遺作展辞し梅雨の月

万里子 (紀・芳・亜)

全 (忠・三)

全 (恭・孤)

全 (堅)

《互選句》

☆ 黙祷を終へし後から蟻動く

(名句だが類想句ありそう?)

盛雄 (万・猛・忠・敏・ゆ・芳・正・亜
・天・三)

すててこや男料理の出刃を研ぐ

(青：厨房にステテコ。涼しくてよろし)

堂哉 (猛・孤・ゆ・允・く・青・天・三)

六点

☆ 父の日や禁煙グッズを贈らるる

(青：煙草はやめるがよろし。グッズをの「を」は不要)

昇 (万・忠・ゆ・允・正・青)

五点

☆ 合羽着る犬も主も暴れ梅雨

(昇：孫からの禁煙パイプ。流石にブレッシャー掛かります)

忠彦 (万・清・敏・亜・青)

弘子 (紀・恭・孤・龍・正)

☆ 夏至の夜一人ぼっちの土不踏
どたばたに端役張り切り夏芝居

正明 (万・孤・允・亜・天)

ゆたか (紀・孤・敏・允)

そらお (恭・龍・く)

紀久男 (万・龍・天)

☆ 梅雨入るや治まる妻の地震酔ひ

(☆↓梅雨入(いり)や妻の地震酔治まりて)

志ん馬の「三方一両損」

汗光る志ん朝譲りべらんめえ

全 (敏・ゆ・允)

☆ カラフルなステテコを選(よ)る女客

全 (万・龍・く)

☆ 梅雨時によく目に入(はい)る白い花

猛 (万・芳・亜)

(上五↓「梅雨時や」にしたら如何)

ネクタイをせぬ喉仏涼みある

弘子 (清・芳・亜)

偏食のない子に育ち初浴衣

恵洲 (清・く・青)

(青：親のしつけが良かった)

梅雨寒やすらすら読めるプリユタルク

天牛 (敏・允・正)

被災地の瓦礫の山や梅雨止まず

そらお (堅・紀)

☆ 友見舞ふ句集に笑ふ梅雨晴間

清 (万・忠)

老鶯の声や目覚めの床に聴く

恭延 (堅・猛)

七変化庭より部屋に移りけり

全 (忠・芳)

大震災

なほ生きる望みや堅し夏の浜

全 (堅・く)

二点

釣れたての鰯のなめろう至福顔
のぞみ号代田の夕陽伴走す

(青：広い風景がよく見える)

避難所の乳飲み子の笑み緑風

梶子(くちなし)や戀といふ字が忍び寄る

打水や人間臭さが甦える

観光の大網を引く浜薄暑

(昨夏、茨城県にて)

青春の煌めきシヨパン風薫る

新築に生ふ青蔦の遠慮かな

我が國は五季あるとかや梅雨激し

☆ 十葉や飛び火せしごととはびこれり

☆ 老鶯と等角にゐて畑打つ

宅配便甲斐駒思ふサクランボ

隠れんと姿見せぬかほととぎす

梅雨寒や出掛けに一枚重ね着(ぎ)す

☆ 燕の巢最早昔の想ひ出に

フイトンチツド浴びて近くの夏木立

紫陽花や友退院のメールあり

黒南風(くろはえ)や漂流船は釧路着

バベルの塔かくや都庁舎夏の雲

鈴生りののドリアン園や風匂ふ

天井の大扇風機コロニアル

老鶯の電線の上(へ)に声競ふ

早死にと遅死にとあり七月へ

グラジオラス砂漠を越えるローレンス

母の日やカーネーションに代る花

相模線水面の映る田植時

父の日に行くエチオピア料理店

万華鏡覗くようなり梅雨の傘

忠彦 (清・紀)
堂哉 (青・芳)

ゆたか (清・恭)

正明 (紀・三)

全 (忠・ゆ)

昇 (孤・く)

規雄 (清・ゆ)

亜也 (紀・恭)

天牛 (堅・猛)

全 (万・猛)

盛雄 (万・三)

清 (紀)

紀久男 (堅)

猛 (天)

全 (万)

全 (青)

忠彦 (敏)

全 (天)

恵洲 (恭)

ゆたか (猛)

全 (正)

隆 (紀)

正明 (紀)

全 (紀)

和夫 (三)

全 (紀)

天牛 (正)

全 (龍)

● 次回青葉会

七月二十八日(木) 午後六時〜九時

▲ 当季雑詠各自五句 投句二句

八月二十五日(木)

九月二十二日(木)

コンチエルト「談話室」

以上文責 紀久男

平成二十三年六月句会報

一、今回は万里子先生以下9名出席。投句は初参加の古田昇さん（他の結社に所属、句会開催日同日）含む10名。

社友会ホームページ掲載、恵洲さんの「青葉会月例会300回に到達！」（カラープリント）と孤舟さんが編集長の「爽樹」7月号そして向島きよし女将からの杉板製絵葉書と新潟行形亭（いきなりき）からの絵葉書を回覧しながら開始。先生からのアボカド煎餅と焼栗、永田美智子さん（明彦さん妹さん）からの神戸クッキー（フロイン・ドリーブ）、小生の「久保田・千寿（一升壘）」を賞味。ビールで喉を潤し乍ら忠彦さん司会で順調に推移。

御覧のように盛雄さん堂哉さん昇さんと欠席投句のお三人が高得点でした。成績上位を投句者三人で占めるのは当会始まって以来かと思えます。

当日の話題は大震災の政府対応と句集の評判（一）会員諸兄の上達ぶり（二）先生からは草田男指導の昔に到底及ばないと（三）龍平さんの軽妙な怪文？等々。コンチェルトを運営する帝國ホテル従業員のアロハシャツの制服が涼しげで決まっております。

二、関係者近詠

未明から余震続きや落椿	万里子	朝市の秤を零れ螢鳥賊	孤舟
革命家今独裁者寒返る	全	花曇制空権は鳶にあり	全
傾く枝の波に触れつつ辛夷咲く	全	柳絮飛ぶ生後十日の仔牛の眼	全
照姫の消えし池へと飛花しきり	全	——『爽樹』7月号——	
鯉跳ぶや小波の花筏から	全	父の日イ酒盗にたたき美し酒	允章
満開の花下に幻覚余震酔ひ	全	藍浴衣足首細き女かな	全
原発禍逃れ来授乳の春炬燵	眞希子	手花火に赤き鼻緒の少女かな	全
地震の地へ桜前線北上せよ	全	額の花ポートレートの久我美子	全
乳飲子を迎ふる家や若緑	全	手翳せばアンテナの上四十雀	恵洲
足裏まで円き嬰を抱き青き踏む	全	孫の手の背にひやりと梅雨に入る	全
空つばの棚に残りの海蘊へもぐく買ふ	弘子	のりと	
春燈や笑ひたき人笑はせて	全	地鎮祭の祝詞聞ゆる梅雨晴れ間	全
相槌の尽きて暇の春炬燵	全	——大鉄会6月——	
感歎の声なけれども花薺	全	落つるほかなき噴水に喝采を	青史
春風や無想に歩く尾根づたひ	忠彦	水馬只今幾何学受講中	全
山鳩の目の鋭さや若葉光	全	初鮎は微へかすかに苦く退職日	五郎太
返り咲く人に投票桜蕊	全	紫陽花に道を譲りし寺の雨	全
時空超え秋芳洞を出れば春	恭延	夾竹桃毒ある言葉聞き捨てる	芳博
宮島や春の海から朱の鳥居	全	靴の黴拭ひて明日は社友会	全
核廃絶ドームに祈る春の天	全	冷奴おかかは踊るけだるげに	全
被災者の身になりかねつても朝寒し	和夫	梅雨冷やくどい殺し場ポーズ決め	紀久男
震災の総決算かよ春風	全	しやくれ顎河内屋徳ぶ夏祭	全
——『萬緑』7月号——		父の日に虎屋の「あぢさゐ」頂けり	全
目葉のひとつく鳥雲に入る	孤舟	職を辞し夢をあれこれ梅雨夕焼	堂哉
それぞれの名前大きく入園す	全	せせらぎを木道に聴く水芭蕉	河原四郎

平成二十三年七月八日

紀久男 記